［エッセイ］

さすらいの「ヒップホップの息子」、ガエル・ファイユ

佐々木　裕　子

ブルンジ出身のガエル・ファイユ (Gaël Faye, 1982-) は、彼が初めて執筆した小説『ちっちゃな国 (*Petit Pays*)』[1]が、2016年高校生が選ぶゴンクール賞 (Prix Goncourt des lycéens) を始め数々の賞を受賞したことにより、その名が知られるようになったが、もともとは、「ラッパー」、「スラマー」として活動していて、ミルクコーヒー&シュガー (Milk Coffee and Sugar) というグループのメンバーとしても活動していた。2013 年に彼の初めてのソロアルバム『ピリピリバタークロワッサン (*Pili pili sur un croissant au beurre*)』[3]という CD が発売され、その CD を偶然耳にした出版社の人がファイユの言葉に関心を持ち、小説の出版を促した経緯がある。インタビューの中で、この CD に「自分の人生の一部が詰めこまれている[4]」と言っているように、彼のソロアルバム制作への思い入れは強かったようだ。

紙切れとボールペンが 眠れない夜の妄想をなだめてくれる
亡命の地からほど遠い いくつもの大きな湖のあるアフリカのちっちゃな国よ
以前の生活、戦争前の生活を思い出させる
帰郷することなく、ふるさとでの感覚を思い出すために さまよいながら
ちっちゃな国よ お前にこのポストカードを送るよ
僕のバラ、僕の花びら、僕の結晶、僕の生まれた大地よ
Une feuille et un stylo apaisent mes délires d'insomniaque
Loin dans mon exil, petit pays d'Afrique des Grands Lacs
Remémorer ma vie naguère avant la guerre
Trimant pour me rappeler mes sensations sans rapatriement
Petit pays je t'envoie cette carte postale
Ma rose, mon pétale, mon cristal, ma terre natale[5]

小説のタイトルにもなった「ちっちゃな国 (Petit Pays)」は、『ピリピリバタークロワッサン』に収められた曲の一つである。日本語訳では伝わらないが、ラップ特有の韻をふむ言葉遊びをしながら、上記のような歌詞から始まる。「ちっちゃな国」とは、言うまでもなく彼の出身地、ブルンジのことであり、ブルンジに思いを馳せながらファイユが歌詞を書いた曲である。自分をバラの花に例えながら、ブルンジの大地から発芽し、太陽を浴びながら、雨を吸収しながら、花となるために必要なあらゆる要素をブルンジの中で熟成させ、細胞分裂を行い花となっていく過程を示しながら、ブルンジの大地で自己形成していった様子を感じ取ることができる。

●ブルンジ内戦[6]

「ちっちゃな国」の中で「高いところに引っかかった 小さなアフリカの端くれ (Petit bout d'Afrique perché en altitude)」という歌詞があるように、ルワンダ、コンゴ民主共和国、タンザニアと国境を接する、北海道の面積3分の 1 ほどの小さな国、ブルンジは、国土の多くが高地でコーヒー産地として世界に名が知られている。

1962 年ベルギーから独立したブルンジでは、人口的少数派のツチが国軍を基盤に政治権力を独占してきていたが、多数派フツと少数派ツチの間で抗争が繰り返されていた。1993 年フツ系のンダダエ (Ndadaye) が選挙によって大統領に選出されると、両部族間の対立が激化

し、国軍がンダダエを拉致し暗殺する事件が起こった。ンダダエ暗殺後、1994 年に 1 月に国民議会によって、ンダダエ政権時の農相であったフツ系のンタリャミラ (Ntaryamira) が大統領に選出されたが、4 月には、ンタリャミラとルワンダ大統領のハビャリマナ (Habyarimana) が搭乗していた飛行機が撃墜され、両大統領とも死亡する事件が起きる。ルワンダでは、この事件後、20世紀アフリカ最大の悲劇と言われるツチの大量虐殺に発展していった。

1993 年の大統領暗殺を契機に内戦に突入したブルンジでは、軍事的には解決せず、2003 年に和平協定が結ばれることとなったが、その後のブルンジ情勢は、今なお不安定なままで、経済的にも世界最貧国の一つとして位置付けられている。

●ブルンジからフランスへ：ラップへの目覚め

1982 年にルワンダ人の母とフランス人と父との間にブルンジで生まれたファイユは、ブルンジでの 2 年の内戦の経験を経て、1995 年 13 歳の時にフランスにやってきた。自伝的要素を多分に含んだ小説『ちっちゃな国』では、子供の視点・感覚を通して、ブルンジの日常生活、内戦が激化する様子が描かれる。

ファイユが『お前のフランスをラップしろ (*Rap ta France*)』のインタビューの中で語っているように、子どもの頃は、サッカーをしたり、友達と過ごしたりするのが好きで、読むのも書くもの嫌いだったという。そんなファイユが、詩を書き始めたのは、内戦から避難するために、ブルンジからフランスに「送還」される数日前のことであった。当時のブルンジの状況は、非常に緊迫していて、みんな自宅で足止めされている状態。そんな耐え難い待ち時間に詩を書き始めたという。

2 年の紛争を経て辿り着いたフランス。環境は大きく変化した。大きな庭付きの家からパリ郊外の小さなアパートへ。子供の頃すでにルワンダで難民生活を送り、ブルンジへの亡命を経験している母は、「進まなければならない。過去を見てはいけない。[7]」というばかりで、学校でも、家族の中でも自分の居場所を見つけられずにいたファイユがフランスで出会ったのが、ラップだった。ブルンジにいたころも、MC ソラー (MC solaar[8])、ベニー B (Benny B[9]) などを聞いていて、フランスに来た当初は、ラジオから流れてくるアリアンス・エスニック (Aliance Ethnik[10]) やメネリック (Menelik[11]) などを好んで聞いていたようだが、ラップがとりたてて好きだったわけではない。しかしながら、冬のスキー合宿でたまたま出会った男の子からジェネラシオン 88.2 (Générations 88.2[12]) という FM ラジオを教えてもらったことをきっかけに次第にラップへ夢中になっていくようになり、ラップの歌詞を書き始めるようになった。もともと、詩を書いていたファイユだが、音に合わせて自分の詩を載せてみたくなったのだという。詩を書くことと並行しながら、音に合わせて詩を語るということをその頃からするようになった。ブルンジのフランス語しか知らなかったファイユは、ラップを聞きながら、俗語や逆さ言葉 (verlan) など、まるで外国語を学ぶように若者のフランス語を学んでいった。

●ラップに夢中になった高校時代

フランスに住み始めてからの中学時代は、学校に友達がいないつらい時期を過ごしたが、高校生になると初めて友達ができる。グアドループ出身の男の子だった。彼と出会った当時の様子を次のように語っている。「単刀直入に言おう。フランスに来て以来、『黒人』と会うのは初めてだったんだ。[13]」彼は、グアドループをルーツに持ちパリ近郊で育ったのではなく、本当にグアドループから来ていて、ファイユと同じように、2 つの文化を生きるという経験をしていた [14]。ブレイクダンスをしていた彼は、毎週土曜の午後に青少年文化センター (MJC[15]) に通っていた。ファイユが授業中いろいろ書いているのを知っていた彼が、「ついてこいよ。お前のように書いているやつらもいるから、会うべきだ。[16]」とファイユを誘う。演劇か小説かなんかのアトリエなんだろうと思って行ってみると、ラップのアトリエだった。それから、ファイユも土曜の午後、MJC

のラップのアトリエに通うようになり、MJCに行かないときは、音を聞くためだったり、ダンサーの友達に付き添ったりしてパリのシャトレに行くようになった。当時、パリのシャトレ界隈は、ダンスバトルがあり、ファイユに言わせると、パリ中のヒップホップが集結していた場所だったようだ。

そんな風にして、ヒップホップ仲間と戯れながら過ごした高校時代、「処理済み (*Dossier Classé*)」という名のミックステープの中で、初めてラッパーとして参加し、それ以降、たくさんのミックステープを作り、手渡しで売ったり、服屋で売ったりしていた。2000 年には、ミックステープではなく、初めて CD にも参加している。

ラップに夢中になった高校時代だが、ラップで食っていけるとは思っておらず、ラップで生活しようとは思っていなかったという。アルバム『ピリピリバタークロワッサン』の 1 曲目に収められた「アフランス (A-France)」の中に、ファイユがラップする時の心情を綴っている。

僕は孤独で、時々ペンを取り出す
僕はラッパーじゃない．ただ苦さに満ちた言葉をこねくりまわす者だ
フランスは避難場所　不在　亡命
苦悩、でもひけらかしてはいけない、恥ずかしいから
自分の夢　希望　期待とはかけ離れて暮らしている
アフリカとフランスの間で引き裂かれた状態　それが僕を殺す
J'suis solitaire et des fois je sors la plume
J'suis pas rappeur, juste un virevolteur de mots pleins d'amertume
L'AFRANCE est l'asile, l'absence et l'exil
Souffrance mais par pudeur faut pas que je l'exhibe
Je vis loin des mes rêves, de mes espoirs, de mes espérances
C'est ça qui me tue d'être écartelé entre Afrique et France[17]

13 歳までブルンジで育ち、内戦を逃れてフランスにやってきたファイユにとって、フランスは、自分の場所ではなく、祖国を追放されてやってきた、空虚な地として映る。パリ郊外のアパートに住み、避難民としての肩書きを与えられ、異国の地フランスで感じる疎外感。アフリカに帰りたいのか、帰ることができるのか。身体的にはフランスに住みながらも、彼の精神はフランスとアフリカを行き来する。フランスとアフリカの間で精神が引き裂かれた状況のファイユの心を落ち着かせるもの。それが書くことだった。ファイユが書くときの姿勢は、単なるパッション以上の意味を持つ。

僕はひどい状況の国を離れた
僕は誓った いつか自分が大臣になってやると
J'ai quitté le pays et sa situation sinistre
J'm'étais promis, ben qu'un jour je deviendrai ministerre[18]

紛争の国を離れ、フランスにやってきたのは、ラップするためではなく、学業を終えるため、ブルンジに帰って国を立て直すため。そんな責任感を感じていたことを、インタビューの中でも語っている[19]。ラップすること、書くことは、彼を解放してくれる手段であったが、ブルンジにとどまる友人を差し置いてフランスにやってきたことに対する義務を自分自身に課していたファイユにとって、ラップで食っていくことは、別次元のことであった。

●スラムとの出会い

フランスの高等教育機関であるビジネススクール (école de commerce) に進んだファイユ

は、学校の義務としての企業インターンの受入先を探されなければならなかった。クラスの中で最後まで受入先が見つからないのは、黒人かアラブ人。名前だけでは、自分がどんな人か、どんな様相をしているかはわからない。面接前の電話で話すときと実際に会って面接で握手をするときとの間には、何かしらの緊張感があったという。ファイユは、そんな微妙な空気感から感じる人種差別にうんざりしていた。そんな時にロンドンのノッティングヒルのカーニバルに行って、フランスとは違うマルチカルチュアルな世界を目にし、ロンドンで仕事をすることに決める。仕事を見つけ、2008 年終わりにフランス戻ってくるまで、パリとロンドンを行ったり来たりしていた。

そんな時期にファイユが出会ったのがスラム[20]だった。2004 年に「ルワンダのツチに対する虐殺追悼のために若者とスラムの戯曲を書いている」というアクパス (Akpass[21]) という人に出会い、スラムイベントを企画する若者のグループに加わった。ルワンダ人でもないのに、世界に対して目を向け、より深い部分を話して、何よりもテクストを一番に考えているグループだった[22]。そこで出会ったのが、ミルクコーヒー&シュガーの相方となる、エドガー・セクロカ (Edgar Sekloka[23]) だ。ラップに対する情熱を共有していて、ファイユがラップに夢中になるきっかけになったラジオ、ジジェネラシオン 88.2 (Générations 88.2) を聞いていて、ファイユと同じように、ナズ (Nas[24]) やモブ・ディープ (Mobb Deep[25]) といった東海岸のラッパーが好きだった。それから、スラムカフェに通い始めるようになり、スラムコンクールで優勝し、ボブ・マーリーの家族に会うためのエチオピア旅行も獲得している。

商業化していくラップに対して違和感を感じていたガエルは、ラップから距離を置き始め、書くことの情熱は、次第にスラムへ向けるようになっていた。しかしながら、アブダル・マリック (Abd al Malik[26]) やグランコールマラード (Grand Corps Malade[27]) がメディアによって世に知られるようになると、スラム界にも次第に商業主義的な方向へ流れていく。ファイユによれば、よくスラムを批評する人は、グランコールマラードやマリックにしか目を向けないまま、「スラムとはこんなもんさ」と結論づけるが、ファイユがスラムシーンにいた 2004 年から 2006 年頃は、俳句だったり、散文詩だったり、高尚な文学だったりと、あらゆるスタイルや表現の形があったのだという。[28]

●スラムなのか？ラップなのか？

ヒップホップにのめり込み、そしてそこから距離を置く。スラムにのめり込み、そしてまたそのスラムからも距離を置く。そうすることによって、気がついたことをファイユは次のように言っている。

> 何よりもわかったのは、一番大事なのは、フローでもなく、態度でもなく、ラップの中何よりも勝っていたテクストだったんだ
>
> J'ai surtout compris que le plus important ce sont les textes, ce n'est pas le flow, ce n'est pas l'attitude, ce qui avait pris le pas dans le rap.[29]

ラップやスラムがメディアを通して商業主義に傾倒していくところから距離をとったファイユが自覚したのは、テクストを大事にすることだった。それ以降、自分の書き方が変化したのだという。

2008 年終わりにイギリスからフランスに戻り、アルバムを作ることしか頭になかったファイユは、インターネット上でピリピリのプロデュサーとなるギョーム・ポンスレ (Guillaume Poncelet[30]) と出会い、ソロアルバムを準備し始めようとするが、並行してベン・ロンクル・ソウル (Ben l'Oncle Soul[31]) と仕事をしていたポンスレが多忙を極め、制作は先延ばしされることになる。待ちきれなかった

ファイユは、セクロカに呼びかけ、彼とアルバムを準備し始め、ミルクコーヒー&シュガーとして、2009 年に EP 版が発売され、2010 年には、ベン・ロンクル・ソウルとの仕事を終えたポンスレも加わってアルバムがリリースされた。その後、かねてから熱望していたソロアルバムをポンスレが総合プロデュースの下で制作され、ピリピリは 2013 年に、自己資金を投じてリリースされた。

ラップに熱中し、ラップから距離を置くこと、スラムに熱中し、またそのスラムからも置くことを経て完成した彼の CD は、ラップでもあり、スラムでもあり、様々な要素が入り混じっていて、「ラップ」や「スラム」ではくくることのできない仕上がりになっている。

●アーティストとしてファイユが抱える矛盾

ミルクのアルバムも、ファイユのアルバムも、「社会派ラッパー」と言われるラッパーたち同様、反体制的精神が貫かれている。そのような態度をとることの「矛盾」を、ファイユは次のように言う。

> 異議申し立てをする、反体制のラップの只中にいて、それを存在させ存続させようと思うとき、
> 大抵はシステムを通過せざるをえない
> Quand on est dans un rap subversif et contestataire et qu'on a envie de le faire vivre et exister, on est obligé souvent de « passer » par le système.[32]

ディスク産業によって、ライブ活動に、メジャー・レーベルからリリースされるにしろ、インディーズ・レーベルからリリースされるにしろ、既存のシステムに意義を唱えようとするラップは、その資本主義システムの中に身を置かなければならないという矛盾を抱えることになる。

> 最初の緊張感　そして最初の矛盾
> 革命か社会的上昇かを選ぶということ
> Première tension, puis première contradiction
> Choisir entre Révolution ou sociale ascension[33]

> MTV の精神分裂病患者が権力に抗う
> Schizophrène sur MTV ça fight the power[34]

『ピリピリバタークロワッサン』の一曲「ヒップホップの息子」の歌詞は、ブルンジに住んでいた頃、ブルンジの若者が夢中になっていたという世界のポップミュージックを紹介するテレビの音楽番組から流れてきたパブリック・エナミー (Public Enemy[35]) の「Fight the Power[36]」のミュージックビデオを見たときの衝撃を回想しながら、エナミーの曲名を使いながら、歌い手としての自分の心境を語ったものであり、自分自身を擁護するものでもあろう。セクロカとは、長年、資本主義に加担することと反体制の態度をとることの矛盾は、終わりなき議論の源であったという。資本主義産業から離れて音楽を作ることも可能であるが、質の高い音楽を作ることができるのか。反体制で、市場からも、産業からも外れたものは、意図は美しいし、テクストも美しいが、すぐれたミュージシャン、スタジオ、技術者を見つけるのは難しいとファイユは考える。[37]

資本主義から離れて納得する CD を制作することの難しさを自覚しているファイユの結論としては、文化存続のために、エナミーがメディアを通して反体制、人種主義差別批判のラップをしたように、「革命か社会上昇か」のどちらかを選ぶのではなく、そのどちらも共存させなければならないのだと、ということだった。反体制の姿勢をとりつつも、資本主義の中に身を置いているからこそ、ヒップ

ホップ文化が、単に流行に終わらず現代に息づいているのだと。「アーティストにとってその二重性とバランスをとるのは大変だけど、資本主義を完全に引き受けたディスクールの横で、そこに埋没しない精神を持たなければならない」とファイユは考える。[38]

●ヒップホップの息子

ムーブメントは下水溝から出発した
尊大なブルジョワのカクテルパーティーへ押しかける
貧困地区からハリウッドへ コンクリートから金へ
De la bouche des égouts est sorti un mouvement
Qui s'invite dans les cocktails du bourgeois condescendant
Des Hood à Hollywood, du béton au bifton[39]

「ヒップホップの息子」でファイユは、怒りを露わにし、社会に対して物申すような姿で歌い上げる。人々が一般的に抱く典型的「ラッパーのイメージ」である。しかしながら、そこには、ラップの典型的イメージをパロディにしながら、商業主義の只中でラップの原点を見失いつつあるラップと、「それがラップである」であると、ラップの価値を植え付けられてしまうことに対するファイユの拒否の姿勢が伺える。

下水溝のような、不衛生な場から湧き起こり、言葉を発したヒップホップムーブメント。リッチなイメージの象徴とも言えるカクテルパーティーへ赴くのは、商業主義の只中でスターダムにのし上がったラッパーたちだろう。ハリウッドスターとなっていくラッパーたちを思いながら、ファイユは曲の中でヒップホップムーブメントの原点に立ち返る。

僕はヒップホップの息子　ヒップホップはレーガン大統領時代に生まれた
空き地の引き裂かれたマットレスの上で奴が飛び跳ねてた
それがラップ　ストリートのガキ
肌の色についての音楽、恥さらしのスタイル
それはジム・コルボウ(ジム・クロウ法[40])の下で生まれ　苦難を乗り越えていった
ベティ・シャバズ[41]とコレッタ・スコット[42]が未亡人になってから
もはや国家も　社会もない　底知れぬ深みの中での DJ スクラッチ
兄弟であるグラフィティが街の外層を不調和に塗るとき
ラングストン・ヒューズ[43]は死に　ハーレム・ルネサンスはゼロに
ドラム缶に火をつけ　そのまわりで　ブレイクダンスをする ビートボックスする[44]
ブロックパーティーの B-boy たちは　何もないところから何かを学ぶ
ラップが　音楽家なき音楽を発明した
ソルフェージュなしで　ゲットーの中で　にくまれっこの弟が生まれた
リーダーたちは　もう語らず　ライムをはじめる
「手を挙げろ！」もう誰も傷つかない
Fils du Hip Hop, il a grandi sous Reagan
Il sautait sur des matelas éventrés dans des terrains vagues
Lui, c'est le rap, un gamin de la rue
La musique sur la peau et le style d'une verrue
Il est né sous Jim Corbeau, surmontant les épreuves
Depuis que Betty Shabazz et Coretta Scott sont devenues veuves
Plus d'État, plus de social, le DJ scratch dans l'abîme

Quand son frère Graffiti bariole l'épiderme des villes
Langston Hughes est mort, Harlem Renaissance zéro
Ça break et ça beat box autour d'un baril brasero
Des B-Boys aux Block parties, apprendre à faire sans rien
Le rap a inventé une musique sans musicien
Sans solfège, naît dans le ghetto le petit frère mal aimé
Les leaders ne parlent plus, ils se mettent à rimer
« Put your hands up in the air! » personne ne sera blessé[45]

ヒップホップの名は、ヒスパニックや黒人が居住の多くを占めるようになった 70 年代のニューヨークのサウス・ブロンクス地区でニューヨーク最大、最強のギャングのリーダーとして名を馳せていたアフリカ・バンバータ (Afrika Bambaataa, 1957-) が、ヒップホップ活動のための組織としてズールーネーション (Zulu Nation) を立ち上げ、すでに世に出ていたラッパー、DJ、グラフィティ、ブレイクダンスの４つをひとまとめにしてヒップホップと命名したものだ。バンバータは、ヒップホップの力で犯罪を繰り返す若者を更生させようとした。

ヒップホップ文化が花開くのは、レーガン政権の下、所得が富裕層に集中するようになった 80 年代以降であるが、「それはジム・コルボウ(ジム・クロウ)の下で生まれた苦難を乗り越えながら」とファイユが言うのは、アフリカから移住を余儀なくされ、黒人奴隷としてプランテーションでの奴隷生活を余儀なくされ、1865 年に奴隷制が廃止されるも「平等」の名の下に、ジム・クロウ法によって、1964 年まで合法的に行われていた黒人差別が背景にあり、黒人の地位向上のため人種差別の撤廃と憲法によって保障されている人間の諸権利の獲得を目指した公民権運動を経てもなお、黒人が社会の最下層となっていた経緯があるからである。公然と人種差別を行ってきた社会や国家に対して望めるものは何もない。そんな彼らがゲットーの中で創造したのが、ヒップホップだった。音楽の基礎など習ったことのない若者が、ビートに合わせて言葉を発するというシンプルでプリミティブなスタイル。それがラップである。

●おわりに

ファイユは、インタビューの中でラップに対する自分の考えを次のように述べている。

今は、奴隷が働く大農場にいることもありえたことからすると、何光年も離れているような、超商業的なことをしているけど、それでも神殿に立ち返るんだ。ヒップホップの世界では神殿は今も存在し、それは、社会的意識であり、存在したいという欲望であり、声なき者の声。ラップの基本はそれなんだ。
On fait des choses ultracommerciales aujourd'hui qui on l'air d'être à des années-lumière de ce que pouvait être un champ d'esclaves, mais on revient quand même à ce temple. Et dans le hip-hop, le temple est toujours là, c'est, je crois, la conscience sociale, l'envie d'exister, la voix des sans-voix. La rap à la base, c'est ça.[46]

未来に対して何の希望を抱くことのできなかったゲットーの黒人たちが生み出したヒップホップの根底にあるものが、「社会的意識」、「存在したいという欲望」、「声なき者の声」であり、それは黒人が奴隷時代より紡いできたメッセージでもあり、「ブラック・ミュージック」にはいつもその精神が宿っているのだと、ファイユは考える。

人種という枠を超えてヒップホップが世界的ムーブメントに発展し、一つの文化となっ

たのは、資本主義システムによって、国益のため、企業の利益のために労働力を搾取され、疎外化していくことに対して違和感を感じた人々の心とヒップホップの根底にあるメッセージが共鳴したからなのかもしれない。

ラップによって、スラムによって、小説によって、ブルンジの内戦を経験しフランスで生活する過程で感じた二つの文化の中で生きる苦悩や現代の生きづらさを表現するファイユの周りには、いつも言葉がある。ヒップホップの原点に立ち返り、その言葉遊びを楽しみつつ、現代の諸問題、自己の問題と立ち向かうためにあらゆるスタイルで言葉と真摯に向き合うファイユの今後の活躍に期待したい。

注

1 Gaël Faye, *Petit pays*, Bernard Grasset, 2016. (2017年6月に日本語訳『ちいさな国で』[加藤かおり訳、早川書房] が出版された。)

2 2016年フナック小説賞 (Prix du roman Fnac 2016)、2016年新人小説賞 (Prix du premier roman), 学生が選ぶフランスキュルチュール・テレラマ賞 (Prix du roman des étudiants France Culture-Télérama) を受賞。2016年ゴンクール賞の最終候補にも残った。

3 Gaël Faye, *Pili pili sur un croissant au beurre* [CD], Motown France, 2013. (「ピリピリ (pilipili)」は、ブルンジで使われているスパイスである。)

4 José-Louis Bocquet, Philippe Pierre-Adolphe, *Rap ta France*, La Table Ronde, 2017.

5 ファイユのCDの歌詞カード「ちっちゃな国 (petit pays)」から引用 (Faye, *op.cit.*)。

6 ブルンジ情勢、ブルンジ内戦については、武内進一「アフリカの『三選問題』: ブルンジ、ルワンダ、コンゴ共和国の事例から」(『アフリカレポート』2016年 No. 54、pp. 73-84)、外務省のインターネットサイト上のブルンジに関する基礎データ (http ://www.mofa.go.jp/mofaj/area/brundi/index.html[2017年9月1日])、 André Guichaoua (ed.), *Les crises politiques au Burundi et au Rwanda 1993 - 1994*, (Université des Sciences et Techniques de Lille, 1995) を参照。

7 José-Louis Bocquet, Philippe Pierre-Adolphe, *op.cit.*, p. 346.

8 MC Solaar (1969-): セネガル出身でフランスで活動するラッパー。90年代から活動し、フランスラップシーンの火付け役の一人と言われる。

9 Benny B (1968-): 80年代から活動するベルギー出身のラッパー。1990年にリリースされた彼の初のシングル *Vous êtes fous !* が、ベルギーとフランスで大ヒットとなった。

10 Aliance Ethnik : 90年に結成し、99年に解散したフランスのラップグループ。メンバーの一人だったCrazy Bは、現在フランスのDJ集団Birdy Nam Namのメンバーである。

11 Ménélik (1970-): カメルーン出身で、フランスで活動するラッパー。 MC Solaarとは大学時代から交友関係がある。

12 1992年に創設され、ヒップホップ、R&B、レゲエなどを流すラジオ局 (http://generations.fr)。

13 José-Louis Bocquet, Philippe Pierre-Adolphe, *op.cit.*, p. 347.

14 « Comme moi, il avait cette expérience de vivre entre les deux cultures » (*Ibid.*)

15 通常MJCと言われるMaison des Jeunes et de la Cultureは、若者の文化センターのようなもの。

16 José-Louis Bocquet, Philippe Pierre-Adolphe, *op.cit.*, p. 347.

17 ファイユのCDの歌詞カード「アフランス (A-France)」から引用 (Faye, *op.cit.*)。

18 同上。

19 *Ibid.*, p. 351.

20 ポエトリーリーディングがバトル的性質を帯びたもの。

21 Akpass : コンゴ生まれの詩人。彼のインターネットサイト (http://www.apkass.com) で、彼の活動について知ることができる。

22 José-Louis Bocquet, Philippe Pierre-Adolphe, *op.cit.*,.

23 Edgar Sekloka : フランスで活動するラッパー、スラマー、小説家。2011年に『今は成熟した大人 (*Adulte à présent*)、2013年に *Coffee* という小説を出版している。現在はソロで活動する。

24 Nas (1973-): 1990年代から活動するニューヨーク出身のラッパー。

25 Mobb Deep : 90年代からアメリカで活動していたヒップホップグループ。2017年にメンバーの一人Prodigyがなくなり、活動は終了する。

[26] Abd al Malik (1975-) : フランスで活動するスラマー、ラッパー。

[27] Grand Corps Malade (1977-) : フランスで活動するスラマー。アブダル・マリックと共に2000年代フランスのスラム界のアイドル的存在となった。ちなみにファイユがスラムコンクールで優勝した時の決勝であたった相手が、当時まだ知られていなかったこのGrand Corps Maladeだった。

[28] José-Louis Bocquet, Philippe Pierre-Adolphe, *op.cit.*, p. 355.

[29] *Ibid.*

[30] Guillaume Poncelet (1978-) : グルノーブル出身の音楽家、作曲家。数々のラッパー、他のジャンルのミュージシャンとも積極的にコラボレーションをしている。

[31] Ben l'Oncle Soul (1984-): トゥール出身のソウル・シンガー。ファイユのアルバム『ピリピリバタークロワッサン』の「イシンビ (Isimbi)」という曲に参加している。

[32] José-Louis Bocquet, Philippe Pierre-Adolphe, *op.cit.*, p. 359.

[33] ファイユのCDの歌詞カード「ヒップホップの息子 (Fils du Hip-Hop)」から引用 (Faye, *op.cit.*)。

[34] 同上。

[35] Public Enemy : 1980年代から活動するアメリカのラップグループ。

[36] モータウン・レコードより、1989年にリリースされたエナミーの曲。スパイク・リー監督の映画、*Do the right thing* (1989) のために作られた曲で、この曲のミュージック・ビデオもスパイク・リー監督の下制作された。

[37] José-Louis Bocquet, Philippe Pierre-Adolphe, *op.cit.*, p. 362を参照。

[38] *Ibid.*

[39] ファイユのCDの歌詞カード「ヒップホップの息子 (Fils du Hip-Hop)」から引用 (Faye, *op.cit.*)。

[40] ジム・クロウ法：南北戦争後、1877年から20世紀に至るまで存在したアメリカ南部諸州における様々な人種隔離法をこのように呼ぶ。主として黒人に対して一般公共物、公共施設の利用を白人と隔離した。1975年の公民権法が1896年には、分離しても平等 (separate but equal)」という、肌の違いにより黒人を分離することは、憲法に違反しないという最高判決が下り、人種隔離政策は「合法」の下進んだ。ジム・クロウ法下の黒人の状況、またその歴史的背景については、パップ・ンディアイ『アメリカ黒人の歴史：自由と平和への長い道のり』(2010, 創元社)[原著：*Les Noirs américains : en marche pour l'égalité,* Découvertes Gallimard, 2009]で知ることができる。

[41] Betty Shabazz (1934-1997) : 1965年に暗殺されたマルコムXの妻。

[42] Coretta Scott (1927-2006) : 1968年に暗殺されたキング牧師の妻。

[43] Langston Hughes (1902-1967) : アメリカの作家。人種差別が世に浸透していた当時のアメリカで、ニューヨックのハーレム地区で黒人の立場から芸術活動を推進しようとする「ハーレム・ルネサンス」という動きが起こった。ヒューズは、その運動の中心的人物の一人だった。

[44] モブ・ディープの「Survival of The Fittest」の曲のミュージックビデオには、火鉢の周りにたむろする若者がラップする姿を映っていて、冬のゲットーで若者がラップするイメージが想起される。

[45] ファイのCDの歌詞カード「ヒップホップの息子 (Fils du Hip-Hop)」から引用 (Faye, *op.cit.*)。

[46] José-Louis Bocquet, Philippe Pierre-Adolphe, *op.cit.*, p. 363.

（本研究所研究員）